

不登校児童生徒教育支援プログラム

相談係長 香 美 穂

KAGAMI Miho

1 実施の目的

「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（平成29年2月施行）では、不登校児童生徒の個々の状況に応じた必要な支援及び安心して教育を受けられる学校の環境整備が求められている。そこで、奈良県と早稲田大学との連携事業として、早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 本田恵子氏の助言を得ながら、不登校児童生徒を対象として、学習支援を行い社会性を育む不登校児童生徒教育支援プログラム（以下「プログラム」という。）を実施し、児童生徒の社会的自立に向けた支援を行った。

2 実施内容と考察

(1) 実施内容

各市町村教育委員会を通じ、県内公立小学校・中学校・義務教育学校に対し、プログラム参加児童生徒を募集したところ、小学生6名、中学生2名の児童生徒（以下「児童等」という。）が参加した。4月からオンラインにて教育研究所の職員向けの研修を開始し、8月から児童等向けのプログラムを実施した（図1）。研修内容、講師、参加者数等は別紙資料に記載する。また、奈良県立教育研究所Webページ（バナー「不登校支援」をクリック）に不登校支援に関する様々な説明動画や教材例を掲載し、情報提供に努めた。

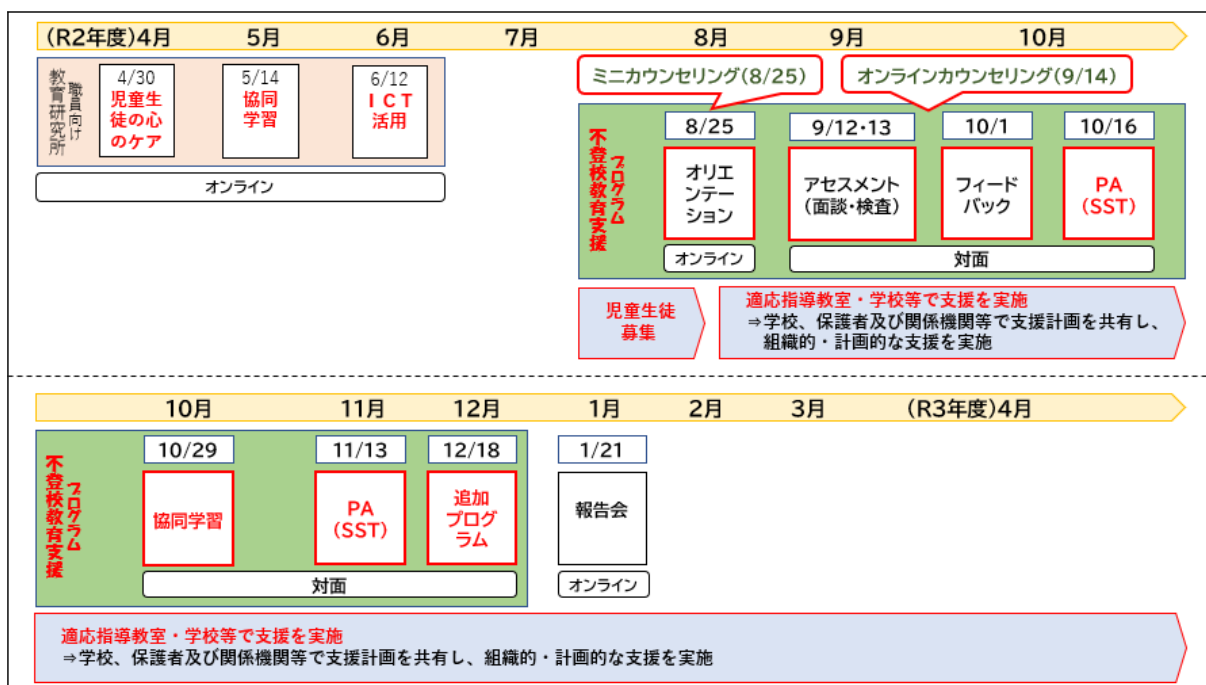


図1 不登校児童生徒教育支援プログラム 実施内容

(2) 考察

プログラムの実践を通して、不登校児童等に対する支援のポイントをまとめることができた(図

2)。また、子どもの心理と具体的な支援方法を場面別にまとめることができた（図3）。支援により児童等の心理状況がどのように変化し、行動変容につながったかが分かる。

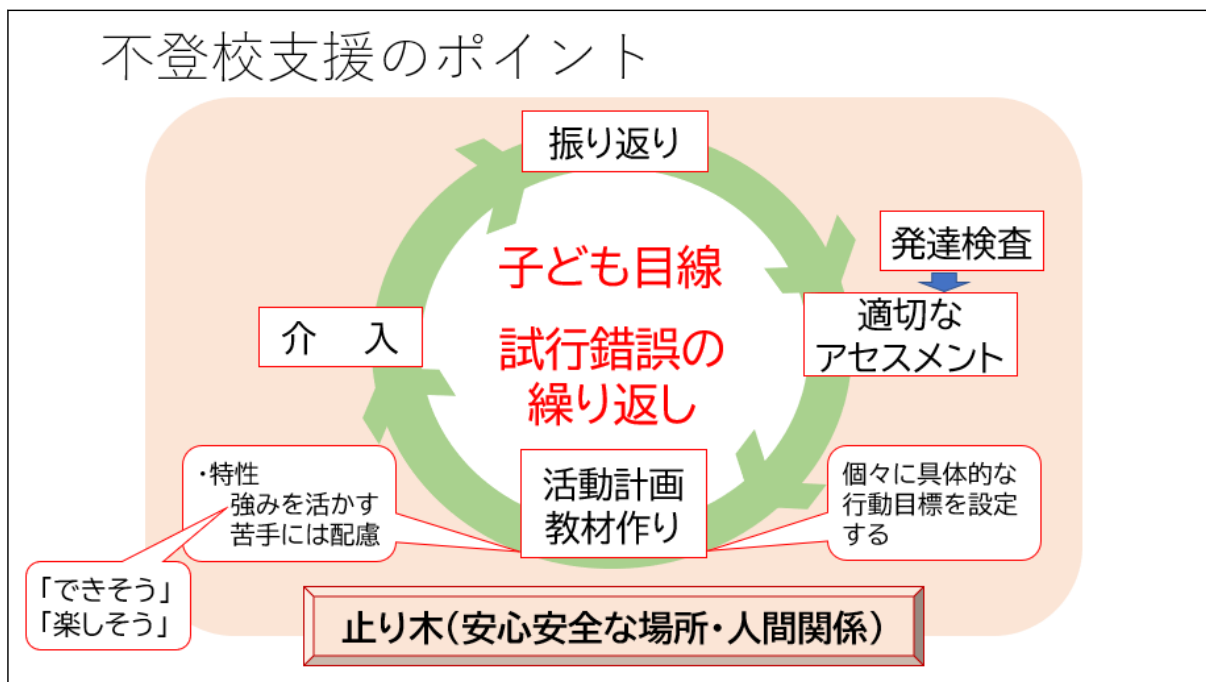


図2 不登校支援のポイント

	ポイント	支援前の心理状況	支援方法	支援後の心理状況	行動変容
1	仲間入りが苦手な児童生徒への対処法	自分のことで精一杯。他人のことを考えたり、見たりする余裕はない。	教職員がファシリテーター役となりつなぐ。キーワードは「介入」「振り返り」。	声掛けのおかげで、周りに目を向けるようになった。	友達との距離が縮まり、会話するようになった。
2	自己表現が苦手な児童生徒への対処法	どう思われるか気になる。どう表現したらよいか分からない。	思いを受容。安心・安全な場所を確保。表情カードを使い、語彙を増やす。ワードウォールでひな形を示す。	分かってくれそう。同じ悩みをもつ友達だから安心。例があれば、何とか表現できそう。好きなことについて話したい。	みんなの前で発表できた。友達に声掛けできた。いつもより饒舌になる。
			体を動かすことで、頭と心をほぐす。	体を動かすことに気をとられて、緊張しない。体を動かすことは楽しいので、気分が上がる。	
3	授業を受ける態度の悪い（立膝をつく）児童生徒、学習意欲の低い児童生徒への対処法	不安でしょうがない。勉強は面白くない。勉強は面倒くさい。分からない！！	好きなキャラクターを配置した教材、題材にした教材を用意。ICT教材の活用。本人の強みを活かして取り組める学習教材を用意。段階別ワークシートの作成。合理的配慮。	面白そう。これなら何とかやれそう。	足を地面に降ろし、前のめりになって学習に取り組んだ。苦手な教科の学習にも意欲的に取り組むようになった。
4	授業中、多動傾向にある児童生徒への対処法	分からなくて不安。授業が面白くない。動きたくて仕方がない。		次に何をすることが分かって安心。あとどれぐらいで終わるかが分かり、我慢できる。声掛けて、集中が途切れなかった。体を動かせて、リフレッシュできた。	検査を最後までやり切った。「まだ～？」「次何するの？」と、教員を自分に取り込もうとする行動が減った。離席する回数が減り、離席しても、すぐに戻ってきた。90分間、集中を途切れさせずに、課題に取り組んだ。

5	暴れる児童生徒への対処法	やりたいことを止められるのは嫌だ。命令口調や叱責されると余計にパニックになる。イライラしているときに構われると、つい手が出てしまう。	思いを受容。 Iメッセージ(※)で声掛け。クールダウンできる安全地帯を確保。 どうやったらできるようになるか、代替案を提示して考えさせる。	分かってくれた。 そう言ってくれば分かる。 余計な刺激がないので、落ち着ける。	キレなかった。 行動を止めることができた。 「ごめんなさい」と謝れた。 本来の優しい面が前面に出た。
6	友達とトラブルになりやすい児童生徒への対処法	友達が何に怒っているか分からない。	表情カードを活用し、感情を理解させる。 「ありがとう。」や「ごめんなさい。」が使える場面を考えさせる。	少しずつ、相手の思いが分かってきた。 どんなときに、「ありがとう。」や「ごめんなさい。」を言えばよいか、分かってきた。	「ありがとう。」や「ごめんなさい。」が言えるようになった。 友達と一緒に遊ぶ場面が増えた。
7	固まったとき、パニックになったときの対処方法	不安でどうしようもない。どうしてよいか分からない。	違う話題で、頭と心をほぐす。 ほぐれたら、気持ちを確認。取り組めそうな課題を提案。	不安から解放され、ほっとした。 落ち着いて考えられるようになった。	自分の思いを伝えることができた。 同じようなことが起こっても、自分なりに対処することができた。 耐性が増した。
8	完璧主義・がんばり屋さんへの対処法	できないことが不安。できないことに直面するのが怖い。 しんどいけれど、やらないと気が済まない。	全体の計画を示し、自分の位置を確認させる。 やったことをポートフォリオとして残し、着実に進んでいることを理解させる。 発達検査から、自分の強みと弱みを理解させる。	焦らなくていいんだ。 結構頑張ったな。 自分でも前に進めることが分かった。	自分なりのペースで取り組めるようになった。 自己理解が進む。
9	不登校の時期に注意すること	眠たい。 生活リズムが合わなくて大変。	日課表などにより、朝型の生活リズムを意識させる。	リズムが合ってきて、体が楽になった。 昼間、ぼーっとすることが減った。	
10	学校復帰の時期に取り組むこと	精一杯頑張っている。 疲れる。 緊張する。	思いを受容。 本人の状態をよく観察し、無理をさせない。 いくつかの方法を提案。 級友、教職員の受け入れ準備。 止り木的な場所の確保。	分かってくれてうれしい。 できそうなことを提案してくれて安心。 温かく迎えてくれた。 疲れたときの居場所があるとほっとする。	登校できるようになった。 学校にいられる時間が長くなった。
11	学校における教育支援体制の充実	支援方法について、見通しや自信がもてず、一緒に取り組もうと言えない。	教職員間の共通理解。 研修で学んだことをほかの児童生徒にも実践。	学校をあげて、支援の輪が広がった。 基本が分かれば、ほかの児童生徒にも活用できる。	ほかの児童生徒にもよい変化が見られるようになった。 児童生徒同士がつながってきた。

図3 場面別子どもの心理と支援方法

(※Iメッセージとは、「私は～」を主語として、自分の気持ちや考えを伝えるメッセージのこと。指示や批判とは異なり、対等な立場でコミュニケーションができるようになるスキルである。)

以下、その成果を踏まえて、不登校支援のポイントを示す。奈良県の教職員にとって、ふだんから行っている不登校支援のポイントを整理でき、新たな視点をもつことにつながれば幸いである。

ア 児童等の「止り木」になること

教員が寄り添おうとすれば、児童等は私たちのことを「理解しようとしている」「心配してくれている」と感じ、心を開く。安心、安全な環境が整えば、児童等は自分自身を成長させようと、外に一步踏み出すようになる。疲れたときには戻ってきて心と体を休め、元気になればまた一步踏み出す。そのような「止り木」に学校や教職員はならねばならない。

イ 「子ども目線」で支援を考えること

我々教職員は、所属する学年や集団を基準に児童等を見ていないだろうか。「〇〇できるはず」「〇〇くらいできないといけない」といった視点ではなく、できないから悩んでいるということを理解し、どうすればできるようになるのかを一緒に悩む。その中から考えた支援方法は、児童

等一人一人に合った支援となる。

ウ 不登校は心や家庭の問題であるとともに、学習の問題でもあるとの視点をもつこと

学校では、児童等一人一人の個性、特性を理解しようとし、支援に取り組んでいるが、必ずしも、見立てと支援が合っているとは言えないのが現状である。不登校児童等が学習に安心して向かい、自信を得られれば、学校復帰へと近づくケースが多い。そのためには、検査結果から、児童等に合う学習支援を行う必要がある。

エ 「介入」の引き出しを増やすこと

家庭や学習の不安、本人の性格から落ち着かない児童等がいる。このような児童等でも、感情が落ち着くと、思考が働くようになる。どのような声掛け等であれば児童等の心や頭をほぐし、和らげることができるか。日頃から、試行錯誤を繰り返し、児童等一人一人に合った介入方法を準備しておかなければならない。何かを言わなければ、しなければと構えすぎると、かえってうまくできないため、自然体で関わられるように日々意識するのがよい。

オ 振り返り（ディブリーフィング）をきちんと行うこと

支援をした直後に、支援が児童等に合っていたかどうか振り返ることが重要である。うまくいったことは継続し、難しかったことは「子ども目線」で見直し修正する。また、1か月を目途に評価会議を開き、複数の目でより広い視点から確認すると、個別最適化された支援が行えるようになる。

3 成果と課題

プログラムでは、まず県教育委員会の職員が、不登校児童等に対する支援に有効な様々な知識やスキル、中でも「子どもの状態の適切な見立て」と「適切な介入」について学び、実践した。その様子を市町村教育委員会及び学校の教職員に伝え、市町村及び学校と協力して児童等を支えることで、子どもの心理状況に少しずつ変容が見られた。結果、適応指導教室につながったり、学校復帰を果たしたりするなど、全員に良い行動変容が見られた。

不登校児童等に限らず、全ての子どもに対しても、どうすれば子どもの感情が落ち着き活動に取り組めるかを支援者が理解し、子どもの感情を和らげる適切な介入をすることが重要であることを学んだ。学習につまずきを感じる不登校児童等は少なくない。また、不登校状態が続くことで、更なる焦りが子どもにも保護者にも生まれる。不登校児童等の個々の状況に応じた必要な支援、及び安心して教育を受けられる環境整備が求められる。

子どもの変容につながる支援には、組織的、計画的、更に継続的な取組が必要であり、各機関同士の連携が求められることを、県、関係市町村そして関係学校で確認することができた。来年度、県の不登校支援に関する取組として、本プログラムで得た不登校児童等に対する支援に関しての知見を広め、教育研究所と各市町村教育委員会の一層の連携の下、不登校児童等に対する組織的な支援実施とその充実を図る。今後も、各地域での不登校支援の更なる充実に向け、教育研究所における不登校児童等支援の実践と市町村各機関への情報発信に努める。

参考文献

- ・ 本田恵子（2020）「休校中の子どもの心のケアと学習の保障」（不登校児童生徒支援プログラム研修資料）

資料

不登校児童生徒支援プログラム講師及び参加者

日時	内容	講師	参加者（ ）は人数
4月30日(木)	休校中の子ども のケアと学習の保障	早稲田大学教授 本田 恵子氏	早稲田大学研修員 (1) 県 (20)
5月14日(木)	協同学習	早稲田大学非常勤講師 遠田 将大氏 早稲田大学教授 本田 恵子氏	早稲田大学研修員 (1) 県 (12)
6月12日(金)	I C T活用教材	早稲田大学非常勤講師 荒川 信行氏 早稲田大学教授 本田 恵子氏	早稲田大学研修員 (1) 県 (10)
8月25日(火)	全体研修	早稲田大学教授 本田 恵子氏	保護者 (8) 早稲田大学研修員 (1) 市町村 (26) 県 (12)
9月12日(土) 13日(日)	アセスメント	早稲田大学教授 本田 恵子氏	児童生徒・保護者 (15) 早稲田大学研修員 (1) 院生 (4) 市町村・学校 (14) 県 (8)
10月1日(木)	フィードバック	早稲田大学教授 本田 恵子氏	児童生徒・保護者 (14) 早稲田大学研修員 (1) 院生 (4) 市町村・学校 (9) 県職員 (6)
10月16日(金)	P A / S S T	まなひ創造アカデミー理事 鎌田 晴美氏 早稲田大学教授 本田 恵子氏	児童生徒・保護者 (14) 早稲田大学研修員 (1) 院生 (2) 市町村・学校教員 (29) 県 (6)
10月29日(木)	協同学習	早稲田大学非常勤講師 遠田 将大氏 早稲田大学教授 本田 恵子氏	児童生徒・保護者 (16) 早稲田大学研修員 (1) 市町村・学校 (19) 県 (10)
11月13日(金)	P A / S S T	まなひ創造アカデミー理事 鎌田 晴美氏 早稲田大学教授 本田 恵子氏	児童生徒・保護者 (16) 早稲田大学院生 (2) 研修員 (1) 市町村・学校 (17) 県 (6)
12月18日(金)	追加プログラム	早稲田大学教授 本田 恵子氏 早稲田大学非常勤講師 遠田 将大氏	児童生徒・保護者 (13) 早稲田大学研修員 (1) 市町村 (1) 県 (7)
1月21日(木)	報告会	早稲田大学教授 本田 恵子氏	市町村・学校 (35) 県 (11)